

【教授対談シリーズ】

Academy  
こだわりアカデミー

● 狩猟採集民から学ぶ自然と人との共生



国立民族学博物館民族社会研究部教授  
総合研究大学院大学文化科学研究科教授

## 池谷 和信氏

Kazunobu Ikeya

1958年静岡県生まれ。81年東北大学理学部地学系地理学科卒業、83年筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了、90年東北大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学。北海道大学文学部附属北方文化研究施設文化人類学部門助手、国立民族学博物館助教授を経て、2007年より現職。専門分野は環境人類学、人文地理学、生き物文化誌学。熱帯の狩猟採集文化、家畜飼育文化の変容に関する比較研究、南部アフリカにおける先住民運動に関する研究、地球環境史の構築に関する研究を行っている。著書に『山菜採りの社会誌 一資源利用とテリトリー』（東北大学出版会）、『現代の牧畜民 一乾燥地域の暮らし』（古今書院）、編著書に『地球環境史からの問い 一ヒトと自然の共生とは何か』（岩波書店）、『日本列島の野生生物と人』（世界思想社）など多数。

対談記事はweb版「こだわりアカデミー」でもご覧になれます。

こだわりアカデミー

<http://athome-academy.jp/>



ゼンマイ採りの様子。かつては東北地方に数千人もいたといわれるゼンマイ採りが、現在は激減しているという（写真提供：池谷和信氏）

東北、アフリカ、

ベーリング海、アマゾン……と、

世界各地でのフィールドワークから

「自然と人との共生」を

考えています。

自然と人間との関わりは、「狩猟採集」から始まった

——先生は、狩猟採集を通じた「自然と人との関わり」をテーマに、世界各地でフィールドワークを展開されていると伺っております。

私たちは学校で、「狩猟採集」については「農耕文明以前の話である」というくらいのことしか教わっていない気がします。先生が、このテーマの研究を始めようと思われたきっかけは何だったんですか？

池谷 私は小さいころから、昆虫採集や植物などを観察するのが好きでした。成長とともに、自然への興味はますます深まり、大学に進学する際も、自然との関わりを持つということでも理学部を選択したのです。そして、大学4年のときに東北の「山菜採りの村」と出会ったのがきっかけです。

——そういえば、山菜採りの研究をされたのは、先生が唯一と伺っております。

東北で狩猟採集といえば、まず狩猟者集団「マタギ」が頭に浮かびますが、先生はなぜ「山菜採りの村」に惹かれたのですか？

池谷 実は「マタギ」のフィールドワークもやったのですが、この研究はすでに多くの研究者がテーマにしているので、何か別の切り口から狩猟採集の研究ができないかと思っていたのです。そんなとき、豪雪地帯の雪崩斜面に生育するゼンマイ採りを生業とする「山菜採りの村」に出会いました。厳しい寒さの中、ゼンマイ採りをする人たちの姿をつぶさに見ることで、自然と人との関係についてますます深く知りたと思うようになったのです。

——そして、東北から世界へと舞台が広がっていったのですね。

池谷 そうです。東北から始まって、

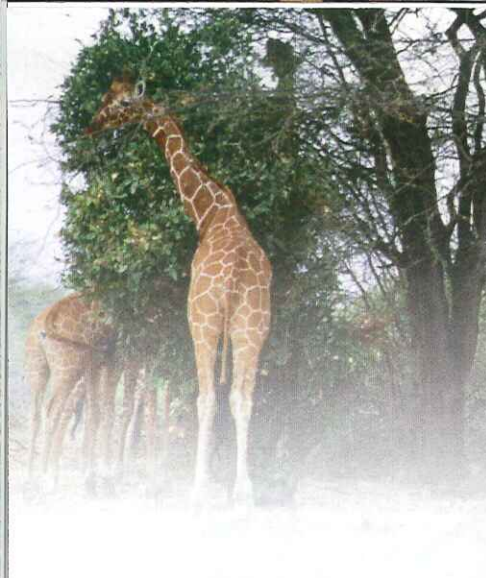
アフリカのカラハリ砂漠、ベーリング海、東南アジア、現在はアマゾンにもフィールドワークの範囲を広げて研究しています。

——砂漠や、極寒、極暑という苛酷な地にまで足を運ばれているんですね。

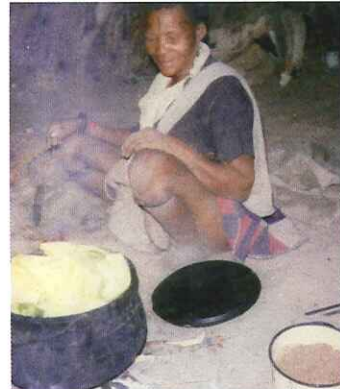
池谷 はい。酷暑の地でも、身を切るような寒さの中でも、人間は狩猟採集を行いながら生きていたのです。

——なるほど。そう考えると、どんな条件でも狩猟採集ができたからこそ、人間は世界中に拡散できたともいえますね。

池谷 そうなんです。地理や気候、風土の違いはあれ、人間にはどんな環境にも適応できる力があるのです。



カラハリ砂漠の狩猟採集民「サン族」が行う犬猟。犬を使って獲物の動きを止め、投げ槍で仕留めるというもの(写真提供:池谷和信氏)



(写真右)アフリカの野生スイカは甘くなく、大きさもソフトボール程度の小さなもの  
(写真左)水分補給のためにそのまま栽培スイカを食べたり、鍋で煮て食材とすることもある(写真提供:池谷和信氏)



## 狩猟採集の本場 「アフリカ」で、 多くの驚きと感動を体験

——世界各国をめぐるフィールドワークの中でも、特に先生は20年以上もの間、アフリカのカラハリ砂漠での研究に携わっておられます。具体的には、どんな活動をされてきたのですか？

**池谷** 狩猟採集民としてよく知られ、ボツワナのカラハリ砂漠で暮らす「サン族」に弟子入りしましてね。灌木と草に覆われた砂漠の大地を延べ1000kmもの距離、彼らと一緒に狩をしたこともあります。

——1000kmですか！それはすごいですね。その体力と気力を支える強靱なバイタリティーは、どこから生まれてくるのですか？

**池谷** 確かに厳しいんですが、それ以上に味わうことのできるたくさんさんの感動が私を突き動かすのです。

例えば、何日も何日も追い回してようやく見つけた獲物を投げ槍で刺しても、それでも獲物は逃げていくんです。走って走って追いかけて、そうしてやっと獲れた時の喜びといったら！思わず涙が出そうになります。

——苛酷な環境だからこそ、仕留めた時の感動が大きいんですね。  
ところで、狩猟だけでなく、植物の

採集というのも、アフリカの砂漠の中で行われているんですか？

**池谷** はい。実はあまり知られていないのですが、スイカの原産地はカラハリ砂漠だといわれています。水の入手が困難な砂漠の住民にとって、スイカは昔から水分を補給してくれる、いわば「砂漠の水瓶」のような役割を担っていたんです。

——ウリ科のヒョウタンがアフリカ原産だというのは聞いたことがありますが、スイカもアフリカなんですか？

**池谷** そうなんです。でも、私たちが食べているスイカとはだいぶ違います。まず甘くない。野生スイカの大きさはソフトボールくらいの小さなものなんです。彼らはそれを栽培し、水分補給のためにそのまま食べたり、鍋で煮たり焼いたり、また、種は栄養価が高いので炒って粉末にしちりして、食材としています。

## 自然の「区分け」は、 地球の未来に望ましいか否か

——カラハリ砂漠ばかりでなく、先生は世界各地さまざまな土地を訪れ、その土地土地で、人間が多様に自然と関わる場面を見ていらつしやるんですよね。

**池谷** ええ。ペーリング海ならクジラ猟やトナカイの牧畜がありますし、一方、アマゾンに行けば密林の中で20mも上にいる獲物を長い吹き矢で獲ったりしています。さらに、獲物を皆で分け合って食べたかと思えば、その獲物が連れていた子どもを親に代わって育て、大きくなったらまた食べるといった食文化もあります。われわれがまったく想像もできないような形で、自然と関わりながら生きています。



——自然と人間との関わりは、どこに行っても密接であることがよく分かりました。ただ最近では、自然は自然、人は人、と区分けしたり、狩猟を禁止する区域を作るなどの動きが見られますよね。

**池谷** おっしゃる通り、自然と野生動物の保護を目的に指定される国立公園、世界遺産などは、いわば自然と人とを「区分け」していると言えます。つまり、自然と人との関わりが薄れていくということです。果たして、それが地球や人類の未来にとって望ましいのか否か……。この点については、真剣に議論していく必要があると思っています。

また、私は世界の各地を回ってきましたが、日本は山あり、川あり、海あり、気候も寒冷から亜熱帯まで、非常に多様性のある風土です。世界を凝

縮したような自然環境があつて、そうした中で、その環境とうまく調和しながら生きていく文化が培われてきたのです。こうした私たち日本人の文化を、世界にもっと発信していくことも、これからの人類の自然との関わりを考える上で、とても役に立つものではないかと考えています。

——それは素晴らしいですね！日本が培ってきた文化が、これからの環境問題や自然と人との共存を考える上で、大事な指針になっていくことを大いに期待しています。

本日はありがとうございました。

### 「こだわりアカデミー」書籍プレゼント

今月号【こだわりアカデミー】にご登場の池谷 和信氏の編著書『日本列島の野生生物と人』(世界思想社)を、抽選で5名の方にプレゼントいたします。ご希望の方は、①氏名、②貴社名、③住所(送先)、④電話番号、⑤書籍名、⑥本紙の簡単なご感想をご記入の上、下記までご応募ください。

【宛先:「こだわりアカデミー」書籍プレゼント係】  
■FAX: 03-3580-7610 ■Eメール: talk@athome.co.jp  
※2012年5月18日(金)到着分まで有効とし、当選者は、本紙12年7月号にて、発表いたします。応募者の個人情報は、抽選・商品の発送のみに利用します。

